

松山市教育会情報

発行所 松山市教育会
松山市祝谷町1-5-33
☎ 089-933-0354
発行者 高橋 猛
編集 調査研究部

人生を主体的に切り拓くための学び



副会長
横田 公博



「子規さん俳句かるた」より

松山市教育委員会 編
松山市立子規記念博物館 監修

『なぜ勉強するの?』と、子どもたちから問われた時、どのように答えているのでしょうか。私たち自身も、子どもの時に「勉強しなさい。」と、言われ続け、疑問に思ったことがあるのではないかと思います。

実は意外なところでこの質問の答えが出ています。映画「男はつらいよ」です。寅さんが甥の満男くんに問われて、次のように答えています。

『そういうむずかしいことを聞くなと言ったろう。……つまりあれだよ、ほら、人間長い間生きてりゃ、いろんなことにおつかるだろう。そんな時、俺みたいに勉強していないやつは、振ったサイコロの出た目で決めるとか、その日の気分で決めるよりしようがない。

ところが勉強したやつは、自分の頭で、きちんと筋道を立てて、こういう時はどうしたらいいかなあと考えることができるんだなあ……』

寅さんの言った、サイコロの目やその日の気分で決める、それは自分の人生をなりゆきまかせにしていることになります。自分の大切な人生を自分の頭で考え、その時だけの気分や、思いつきだけで判断しない、また、だまされたり、人にうまく利用されたりしないためにも勉強は続けていかなければならないと思います。

また、人はひとりでは生きていけません。いろいろな人と協力し、力を借りて生きていきます。どのように他の人と手をつなぐといいのか考えるためにも勉強は続けていかなければならないと思います。

寅さんの答えはまさに『生きる力』を示しています。加えて「キャリア教育」の視点も示されています。子どもたちが大人になった時、幸福な人生を送るために必要な力を獲得させるとともに、子どもたちが社会の担い手となるうえで必要な力を獲得させることが必要です。

次期学習指導要領では『社会に開かれた教育課程』ということが打ち出されています。これは、よりよい学校教育を通じてよりよい社会づくりを目指すという理念を社会と共有し、子どもたちが上記のような力を獲得するために学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させていくことです。

子どもたちの未来を保障するためにも、豊かな経験をお持ちの教育会会員の皆様の更なるお力添えをよろしくお願いいたします。

平成28年度 報 賞 者

松山市教育会



(難波支部)
川端 一志 先生
理事・支部長



(久枝支部)
近藤 純一 先生
支部長



(湯築支部)
松田 邦雄 先生
会長・理事



(八坂支部)
渡部 英綱 先生
理事・支部長



(福音支部)
松下 志郎 先生
支部長



(北条支部)
横田 勇三 先生
理事・支部長



(東雲支部)
徳永 敏久 先生
事務局長



(新玉支部)
楠本 真人 先生
事務局長



(さくら支部)
森 佐輝子 先生
事務局長



(宮前支部)
岡村 真一 先生
事務局長



(味生支部)
和田 瑞穂 先生
事務局長



(久米支部)
関家 健次 先生
事務局長



(窪田支部)
中原 聡 先生
事務局長



(みどり支部)
桑原 俊文 先生
事務局長



(久枝支部)
篠崎 真宏 先生
事務局長

「えひめ教育の日」記念事業

「まつやま教育フォーラム28」高齢慶祝者(白寿・傘寿)名簿

| | 氏名 | 支部 | | 氏名 | 支部 |
|----|----------|----|----|---------|------|
| 白寿 | 堀内 シゲコ 様 | 味酒 | 傘寿 | 井上 静子 様 | 湯築 |
| 白寿 | 伊藤 深 様 | 道後 | 傘寿 | 梅木 圭子 様 | 湯築 |
| 白寿 | 坂井 ミヤ子 様 | 北条 | 傘寿 | 岩井 倫郎 様 | 湯山 |
| 傘寿 | 客野 照榮 様 | 味酒 | 傘寿 | 木村 卓生 様 | 久米 |
| 傘寿 | 久保田 淳子 様 | 味酒 | 傘寿 | 三好 史雄 様 | 久米 |
| 傘寿 | 藤田 妙子 様 | 味酒 | 傘寿 | 安川 俊二 様 | 浮穴 |
| 傘寿 | 客野 壽雄 様 | 味酒 | 傘寿 | 柴田 隆 様 | 小野 |
| 傘寿 | 尾上 孝 様 | 清水 | 傘寿 | 遠藤 俊男 様 | 小野 |
| 傘寿 | 平岡 澄子 様 | 清水 | 傘寿 | 岡田 武博 様 | 石井 |
| 傘寿 | 高月 昌幸 様 | 清水 | 傘寿 | 村井 功 様 | 石井東 |
| 傘寿 | 菅田 顕 様 | 清水 | 傘寿 | 野本 静雄 様 | 味生第二 |
| 傘寿 | 保田 聡子 様 | 素鷲 | 傘寿 | 川口 博子 様 | さくら |
| 傘寿 | 藤田 ユリ子 様 | 堀江 | 傘寿 | 森 二郎 様 | さくら |
| 傘寿 | 石田 保太郎 様 | 潮見 | 傘寿 | 朝雲 暁美 様 | さくら |
| 傘寿 | 西島 節子 様 | 潮見 | 傘寿 | 大森 光三 様 | みどり |
| 傘寿 | 白石 順子 様 | 潮見 | 傘寿 | 野尻 精一 様 | 姫山 |
| 傘寿 | 三浦 宏介 様 | 宮前 | 傘寿 | 川端 一志 様 | 難波 |
| 傘寿 | 津守 秀子 様 | 高浜 | 傘寿 | 大堀 昭夫 様 | 北条 |
| 傘寿 | 森田 章夫 様 | 桑原 | 傘寿 | 玉井 俊幸 様 | 粟井 |

思い出の学校

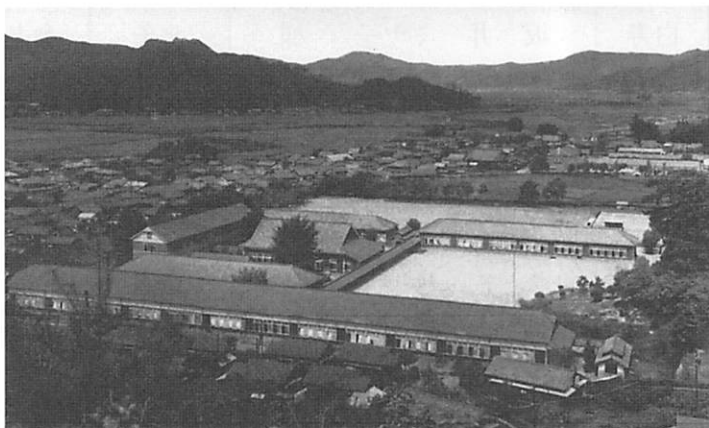
今なお息吹く〇〇最長の平屋教棟 宇和町小学校

野本 静雄 (味生第二小支部)

定年退職後20年。懐旧の念に浸る時間が多くなってきた昨今ですが、昭和35年4月より4年間、現西予市立宇和町小学校に新採教員として赴任した、私の4年間の回想させていただきます。学校のある宇和町の卯之町駅には準急列車が止まり、松山への日帰りも楽になった頃のことです。

当時の宇和町小学校は職員室等のある本館以外はすべて木造の平屋建てでした。一学年がほぼ4クラスに編成されていた学校で、私は毎年クラス替えのある4・5・6年生と持ち上がり、最後の4年目に再び4年生の担任となりました。

広くて、長くて、児童の大勢いる(千名を越す)大きな学校でしたが、中でも校地の梅林に沿って建つ南棟の校舎は、途中切れ目・つなぎ目なしの一棟・平屋建てでした。実に10教室・長さは約100メートル。この校舎で4年生を担任した2か年を過ごすことができたのです。



東西に10教室の南棟

また、高原の盆地に広がる宇和町は

度々大雪に見舞われ、松山市から大晦日の宿直を願い出て元旦の国旗掲揚と全校登校の祝賀に備えた私の善行も積雪で登校中止となり、元旦早々無念を抱いて帰松列車に乗ったこともありました。

さらに、くだんの南校舎の北側は4月の入学式の際でも長い氷柱や雪解けの残雪が長い土手をなす状態でした。

現在この校舎が、校地の上に移築され今なおその勇姿を留め、米博物館・廊下ふき競争などに活用されている次第です。

遠くて深い 思い出の学校

森田 章夫 (桑原支部)

今から57年前、昭和34年4月に赴任したのは、西宇和郡保内町川之石小学校でした。川之石は三崎半島の付け根に位置し、海に面して川あり山ありの自然に恵まれた町で、東洋紡績の工場があり、活気に満ちた、教育に大変熱心な校区でした。当時は学年4学級の大規模校で、郡の中心校として、また、先生方は西宇和の附属小学校と言われるだけの自負を持っておられました。担任は4年生、54人の元気あふれる純朴な子どもたちで、新米の私を優しく受け入れてくれました。

まず、思い出すのは子どもたちとよく遊び、親しんだことです。遊び時間はもとより、昼休み、放課後も、それに休日も子どもたちに囲まれて過ごしました。自然の恵みをいっぱい享受しながら。特に、弁当は教室でおかずを交換しながら食べました。そのおかげで、言葉の壁を乗り越えることができました。初めは理解し難かったことも徐々になくなり、互いの親しみが増したように思えます。

次は、本校の特色となっている音楽に精いっぱい努力をしました。音楽は全担任が担当し、授業はもとより、年二回の音楽会では合唱と合奏の発表が課せられていました。そしてどちらも、ピアノは担任が弾くので、バイエルをやっただけの力では苦勞もひとしおでした。毎日毎日、体育館へ行って夜遅くまでピアノの練習をしました。当時は常直の用務員さんがいて、冬には時々、温かいお茶と火鉢を持ってきてくれました。また、二年目には発表会の華となる“リード合奏団”の手伝いをさせていただき、指揮をも任されました。鏡の前で指揮棒を持ち、一生懸命練習しました。合唱団の指揮もしましたので、「棒振り」と主任さんからからかわれるほどになりました。

終わりに、在職四年間で、「提灯学校」の一員にさせていただきました。特に、勉強になったのは、週末の“学年会”で、週案作成を中心に教材研究や生徒指導から教室環境までこまごまと教わりました。お菓子をいただきながらのほっとする時間でした。まだまだ思い出は尽きませんが、最後に慣れない土地での不規則な食事を心配して、四年間もの間、毎日食事の世話をしてくださった隣のTさん、手取り足取りご指導くださった最初の学年のA先生に、深く深く感謝しております。

「教育とは」を教えてくれた南吉井小学校

玉井俊幸(栗井支部)

正岡小学校から南吉井小学校へ転任。北条から通うのはかなりきつかったが、誠にやり甲斐のある、私の肌に合ったすばらしい学校であった。最初の校長さんは、県から来られた新進気鋭のばりばりの方であった。実行力、指導力、行動力、先駆性、進取の気風に飛び抜けていた。職員はやらねばならない状況に追い込まれる、言わば「俺について来い」流なのである。

私は営繕の係になった。台風が来て2階の樋がずれていたが、それを見逃していた。校長さんに指摘され、樋を伝って2階の屋根までよじ登り、修繕した思い出は忘れられない。朝の職員打ち合わせ会は、驚くほど喧々諤々の体であった。前日に打ち合わせはしていたのであろうが、いろいろな意見が出てまとまらないことがしばしばあった。ある朝、私はたまりかねて、「朝からがたがた言わんようにしてください」と言ってしまった。苦い思い出の一つである。宿直室ではよく一杯会をした。これらの一杯会は私にとってほどよい裏の研修の場であり第2の職員室であった。校長さんは教職員一人一人の様子を見ながら多岐にわたって指導された。仕事には厳しいが人間的にはほんとうにやさしい方であった。

ところで、この学校での生涯たった1度の体験、それは4年、5年、6年と3年間も同じ学級を担任したことである。今となっては私の我儘ではなかったのかと反省しきりである。その子どもたちも今年還暦を迎え、過日クラス会を開いた。一仕事を終えた子どもたちの晴れやかな風貌や話しぶりに感無量の一時であった。

また、保健主事の係となり、健康優良学校に応募し、県代表として全国大会に参加した。さすが全国大会、多くのことを学び私の教育の世界が広がった。さらに東京工業大学へ内地留学もさせていただいた。一言で言えば教材の次元分析の研究である。人生の中で一番充実した1年であったように思う。この研究は今も私のいろいろな活動に生きている。本当にすばらしい機会を与えていただいたと感謝している。

体育館に「責任の重荷に耐え、自由の快翼を知る」という安部能成の扁額があり、この言葉が以降私の座右の銘になった。南吉井小学校、9年間ありがとうございました。

えひめ教育の日 記念事業

まつやま教育フォーラム 28 講演会 H28.11.12(土) 文教会館にて

もうひとつのゾウ物語

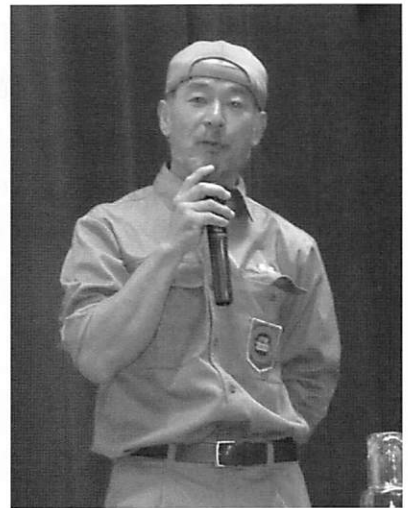
講師 愛媛県立とべ動物園 飼育展示課長

椎名 脩 氏

愛媛県立とべ動物園は、シロクマのピースの他にも3頭のアフリカゾウの親子が人気を集めています。国内で、親子の元気なゾウが見られるのは、実はここだけ。

椎名脩さんは、ゾウの飼育一筋に生き、日本で初めてアフリカゾウの人工飼育に成功しました。その後更に2頭の繁殖にも成功し、希少動物の繁殖に顕著な功績のあった動物園・水族館に贈られる「古賀賞」を四国で初めて受賞しています。

アフリカゾウはワシントン条約で取引が厳重に規制されているため、繁殖は大きな課題です。日本の動物園の130年の歴史の中で、アフリカゾウはたった9頭しか生まれていません。この10年間に国内で誕生したのは、とべ動物園の3頭のみ。その手腕から「レジェンド」と評されている椎名さんのゾウとの愛情物語に、



会場は感動に包まれました。

◆人工保育スタート！

とべ動物園に初めてやって来たアフリカゾウは、アフくとリカさんです。2度の流産の後、媛ちゃんは元気に生まれてきました。けれども、母親が面倒をみることができず、このままでは子ゾウの命が危ないと感じたため、やむなく母親ゾウと引き離すことにしました。

ゾウの人工保育の難しさは、身体の大きさ、ケアの仕方のほかに、群れで生活する動物ゆえにどう管理をしていくかが問題です。まず、ゾウ用の哺乳瓶、ゾウ用のミルクというのがありません。試行錯誤の末、人間用の人工乳にココナッツオイルを足して脂肪分を高め、牛用の哺乳瓶を使って媛ちゃんに与えました。スタッフ6名と獣医3名がローテーションを組み、1日8回ミルクを与えました。

◆数々の苦難を乗り越えて……

媛ちゃんは夜中にひとりぼっちしていると、人間を探して夜通し歩き回り、コンクリートの床で柔らかい足の裏の皮がすれて穴が開いてしまいました。足を1本痛めるだけで命の危険が増すので、苦労してレントゲンを撮ったり痛み止め注射を打ったりしました。

さらに、足を傷つけないようにするため、自宅でせっせとミシンを踏んで、ゾウさん用の靴を作りました。でも、100kgもあるゾウの体重だとすぐに靴がボロボロになってしまいます。そこで、地元のマリショップがウェットスーツの素材で靴を作ってくれました。ゾウの成長は速いので頻繁に新しい靴を作ってもらい、そのおかげで媛ちゃんの足もよくなっていきました。

もうひとつ、媛ちゃんには運動制限を行いました。広いと動き回ってしまうので狭い場所に干し草を敷き詰め、飼育員が夜中もできる限りそばにいて安心して眠れるようにしました。ほかにも、熱中症になってしまったり、堀に落ちこちたりと、様々な困難がありました。それでも媛ちゃん自身に生きる力があつたため、その困難を乗り越えることができました。そして、生みの親の元へ時間をかけて戻していくことができたのです。

◆子育てを学ばせるには

次には、どうしたら親が育児放棄することがなく子ゾウを育てていくことができるのか考えるようになりました。

ゾウは群れで生活します。群れは、年長のおばあちゃんゾウを家長として、お母さん、お姉ちゃん、末っ子という母系集団。生きるために必要なことは群れの中で学びます。しかし、日本にやって来るのは、現地の孤児院やセンターでひとりぼっちの子ゾウです。本来、群れの中で学習すべきことができていないのです。だから、子どもはかわいいのに、どう育てたらよいのか分からず、ストレスだけが溜まり虐待が起きてしまう。

リカさん、媛ちゃんへの子育て学習をどうするか……。まずリカさんには隣の部屋で育てている媛ちゃんを見ながら、母性をもっと育んでもらう。それがのちに子育てに結び付くのではないかと考えました。媛ちゃんには、リカさんの次の分娩や子育てを見てもらう。そして、子ゾウと遊びながら社会性を学んでもらう。

媛ちゃんの成長をリカさんに見せていった成果なのか、4番目に生まれた砥夢（とむ）くんでは育児放棄することなく、母乳を与え自然保育で育てることができました。

◆親子の関係を戻りたい

次に、媛ちゃんに親ゾウと子ゾウとの関係性を感じ取ってもらうため、早い段階で砥夢くんと媛ちゃんの間同居を進めました。当初リカさんと媛ちゃんは、育児放棄と人間が関与して育てられたことが原因なのか、関係はぎくしゃくしていましたが、2頭の間に砥夢くんが入ることで3頭の関係がよい形に変わっていききました。媛ちゃん自身も子ゾウの面倒をみるということも学んでいました。それが次の砥愛（とあ）ちゃんとの関係に結び付いている様子で、面倒の見方が数段レベルアップしていました。

とべ動物園の場合は砥愛ちゃんが生まれることによって、家族や兄弟の本来の姿や絆を再現できました。媛ちゃんは砥夢くんの時の、砥夢くんは砥愛ちゃんの時の、リカさんの発情や繁殖行動や分娩を見て体感して学んでいく。そうして2頭が成長して雄ゾウや雌ゾウと出会ったときの関係性を学んでもらうことができました。

◆いのちをつなぐ

今のままでは、30年後にはアフリカゾウが日本の動物園からいなくなると言われています。それを回避するために、うまく状況を打開しながら、今ある命をつないでいかなければなりません。動物園の動物たちは、人間の手を借りなければ生活できません。その中で人間がどこまで努力できるか。もの言えぬ動物たちの気持ちをくみ、社会性をつくっていき、命を預かり、次世代へつなぐ。人間を含め、生き物にとって一番大切な命や自然について学べる場所が動物園だと思っています。

【講演を終えて】

とべ動物園で3頭のアフリカゾウが生まれ、元気に育てているのは、世界でも奇跡と称されていることを知りました。ゾウの子育ても人間の子育てと通じるものがあり、子育てに悩む母ゾウの姿は人間と同じだと思います。ゾウ自身が学び取れるように、場をつくる椎名さんの慈愛に満ちた姿勢に、教育の本質を改めて教えられました。

ブロック紹介

今年と来年は宮前地区でブロック会

第4ブロック理事 岡田 卓士

第4ブロック理事は、2年ごとの持ち回りでされていて、平成28年度と平成29年度は、宮前小学校が担当することになった。

今年は、中須賀公民館で、第4ブロック会の研修と懇親会をした。平成28年8月9日(火)、9時35分に伊予鉄三津駅に集合して、講師の橋正年さんの案内で、歩いて9人地蔵尊を祀っている祠(写真)を見学した。



9人地蔵尊由来記によると、今から約330年前に山口県の島人が、この地区の出漁者等を強盗者と誤認し、9人を殺害してしまったため、いろいろな禍を被ることになった。9人の無実が分明してから、島人は、この9人を地蔵尊に祀り上げて懇ろに供養した。その後、島には災害がなくなり、人々の願い事も叶い、古来深く信仰されてきた。

中須賀公民館での歴史研修は、「宮前文化遺跡を守る会」の資料をもとにして話し合いをした。

宮前校区の町名の「刈屋口」の由来の話として、古三津刈屋畑の地にて、関ヶ原の戦いのところに、毛利軍(西軍)と加藤嘉明(東軍)との間で、「刈屋畑の戦い」という大きな戦いがあった。刈屋口(かりやぐち)とは、この戦いの入り口でも出口でもあるという意味がある。この戦いは、加藤軍の勝利となったが、伊予の関ヶ原合戦といわれるし烈なものだった。

懇親会では、自己紹介をしながら、会員の身近な話題等で親睦を深め、12時ごろ終了した。

活動の様子

川柳教室の紹介

会員 上田 千鳥

平成3年、愛媛文教会館内に「川柳にぎたづ」が発足しました。講師は関谷省三先生。

発足当初は会員4名でしたが、現在男性7名女性10名の17名です。本年度から、講師は粟田忠士先生。全日本川柳協会に加盟し、愛媛県川柳文化連盟の傘下にも入っています。

会費は年間4千円。全日本川柳協会、愛媛県川柳文化連盟への加盟費や例会の茶菓子代などに支出しています。

例会は、毎月第三水曜日午後1時30分から始めます。宿題は3題で、各題2句ずつ投句します。互選1題、講師選1題、あと1題は会員が交代で選者を担当します。「虫くい川柳」にも挑戦し、冗談が飛び交い、笑い声弾ける句会です。毎月の作品は、柳誌「川柳にぎたづ」にまとめ、10月に300号になりました。

作品の一部を紹介します。

| | | | |
|-----------------|-------|-----------------|-------|
| 米寿迎え次は卒寿と継ぐ元氣 | 丹下 友和 | 悔し涙の数だけ芯が太くなる | 粟田 忠士 |
| 大地震地球の脱皮かもしれぬ | 中島 博臣 | 流行ばかり追って家計は火の車 | 川口 博子 |
| 現役を貫くバスが過疎走る | 高橋 輝子 | 妻にマークされる亭主の空財布 | 関谷 省三 |
| 都知事選が呼び水でした地下の闇 | 岡本 恭子 | 真っ直ぐに生きる覚悟に曲がる腰 | 山下恵美子 |
| 粟立つ日の痛みを包む春の泥 | 仙波 弘子 | | |

8月に宿題抜きの懇親会をしますが、毎年会場を変えるのも楽しみです。1月の新年句会は、句会後の会食で親睦を一層深めています。

教育会会員の皆様、川柳教室で楽しみませんか。